



# 水俣から

谷由布 / たに・ゆう  
NPO法人水俣病協働センター

山沿いの道を見ると、両脇にはみかん畑、目の前には夕日が映えて美しい、そんなところに水俣はある。

現在、私の生活は水俣病患者の生活支援が中心だ。患者自身が年を重ね、家族も年を重ねて、体調や周囲の環境など変化を余儀なくされている。その中で、患者さんとも周囲の人とも一緒に話し、悩みながら、より良い生活をめざしているところだ。

水俣病患者は、年を重ねるごとに体調の悪化が著しい。どこかひとつが悪くなると、全体のバランスが一気に崩れてしまうようにも見える。重症の患者はもちろんだが、見た目ではわからない症状も多く、水俣病の症状は多様だ。運動失調や言語障害、視野狭窄、感覚障害、頭痛、からす曲がり（こむら返り）、しびれ、ふるえ、体のたるさなどなど。また、精神的な症状も多様にある。集中力を保てない、感情のコントロールが難しいなど、本人の性格の問題のように語られることも多いが、水俣病の症状だと感じる。

今、水俣病の認定を求め、裁判をしている人たちもいるが、彼ら

も見た目にはわからないが、さまざまな症状をかかえ、本人が自覚していないこともある。裁判の中で、原告が「被害は私たちの日々の生活の中にあらず」と言った生活で考えると、例えば、立ったままズボンや靴下がはけない、口の中をいつの間にかやけどしている、物をよく落とす、ブレーキを踏み続けることがきついななど、日常を共にしないとわからないことがたくさんある。

今年、水俣病の公式確認から60年だ。水俣病の全容はいまだにわかっていない。水俣病という病気が実際に人間にどれだけの影響を及ぼしているのかもわからない。あまりにも不条理な状況に、この国は何なのだろうか？と思う。

そんな不条理さに対して、水俣で60年たった今も闘いが続いているのは、声をあげる患者さんがいて、彼らに魅了される人間がいるからだと思う。もしも水俣に来る機会がある時には、怒りや悲しみを持ち、日々の生活のつらさがかえながら、個性にあふれた笑顔で生きる人たちの魅力を感じてほしい。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつの間にか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

## CONTENTS ■ HALINA 32 2016.05.01

- 02 Relay Essay ポコポコ 32 水俣から◎谷由布
- 03 [特集] タイ：水産加工食品の現場では——監禁されて働く外国移住労働者◎岡本和之
- 08 [小特集] ネグロスとの出会いから30年——3人の同志と第4期の始まり◎秋山真兄
- 10 [Column] Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記⑭ お隣さんは山の民◎津留歴子 百姓の100章② 〈時給〉から〈自給〉へ、〈時間の自給〉自然と自分を頼る「百姓力」◎斎藤博嗣&裕子 カネシゲファームのドタバタ騒ぎ② NOマネー、NOハニーから一転!?!◎寺田俊 続 Have you ever seen the cinema? ② 『拝啓天皇陛下様』◎重政栄一郎
- 12 わたしの友産友消じまん⑧ スワラジ工房の巻◎鈴木裕
- 13 APLA食堂⑪ ゲランドの塩◎吉田友則
- 14 [Voice from APLA partners] 【ネグロスより】カネシゲファーム・ルーラルキャンパス新体制!
- 15 事務局だより

### 表紙のことば

フィリピン北部バギオの町で見つけた壁掛け。織物の模様になると可愛らしい壺を連想するが、これは「バシ」と呼ばれるサトウキビの発酵酒を造るための大きな甕だ。本物は粘土を固めて焼いた素朴なもので、イフガオ族の家では伝統行事に欠かせない大切な家財。バシは米の植え付けから刈り取りまで、様々な儀礼で神に捧げられる。

山間部の棚田には、このバシを造るためだけのサトウキビが水田の一角にまとめて植えられている。長年ネグロス島の広大な砂糖農園を見慣れていると、なんとも奇妙な光景だった。同じサトウキビでも、その土地の歴史や文化が違うだけで、「苦い砂糖」にも、「神聖な砂糖」にもなるのだ。(大橋成子)

## 特集

# タイ：水産加工食品の現場では 監禁されて働く外国移住労働者

岡本和之 / おかもと・かずゆき  
フリー調査者

輸入に深く依存した日本の飽食文化を鋭く告発した『エビと日本人』(村井吉敬著、岩波新書)が発行されて30年近くがたった。村井氏がその後も追いつけたエビの現場調査の中から、24年前に「エコシュリンプ」が誕生した。

今回、長年タイに関わってきた岡本和之氏から、世界の大手スーパーへ輸出されるタイの水産加工現場の知られざる報告を特別寄稿していただいた。

モノとヒトのグローバル化は年々、圧倒的な規模で進行し、そこに孕まれている問題は過去に比べてより重層的で複雑なものになっている。「食を提供する側が何も言わないのなら、消費する側が自分たちで調べるしかない」と著者は警告する。(編集部)



【上】南部タイ・チュンブーン県パークナム漁港に帰港した漁船員たち。ヒルマのタナカ(パークパウダー)を塗ったまだあどけない若者たち。【右】東部タイ・ラヨーン漁港で声をかけ合って漁網をたたむ漁船員たち。カンボジアからの移住労働者がほとんどだ。

昨年12月、AP通信社は「世界規模のスーパー、奴隷労働で殺むきされたエビを販売」というショッキングな見出しの記事を世界に配信した。

タイ最大の水産加工食品会社タイ・ユニオンに頭や殻をむいた下ごしらえ済み原料エビを供給して

いた複数のサプライ・チェーン業者が児童を含むビルマからの移住労働者を監禁状態で働かせていたことがわかり、国軍兵士を含むタイ当局が摘発して彼らを解放。また、同社によって製品化されたエビ食品がネスレやウォルマートなどの有名ブランドとしてスーパー

マーケットで販売されたり、海鮮外食チェーンで使われたりしていることを明らかにした記事だった。記事の反響は大きく、タイ・ユニオン社トップはこの報道を「Wake-up Call(緊急の注意喚起だ)」として、今年年頭からエビの下ごしらえ処理をすべてインハウス、つ

まり下請け業者を使わず自社工場内で行うと発表。また、タイ軍政は、当初は摘発に国軍が動いたにも関わらず、「我が国に奴隷労働は存在しない、AP記事は誤り」と火消しに回った。そのような反応の背景には、外国人移住労働者の存在なしにはもはや水産加工食

ビルマに限らず、外国人移住労働者のほとんどは、自分の国には仕事がない、あっても収入が低い、という理由でタイにやってくる。しかし、異国で家族ができると今度は子どもの教育という大きな問題に直面する。タイの公立学校は

品産業自体が成り立たない、食のグローバル化を支える構造内のタイと周辺諸国の事情がある。**世界最大級の水産加工の町で起っていること**

首都バンコクから西に車で約1時間、サムットサーコン県マハーチャイ(郡の一区名にすぎないがその周辺まで含めてそう呼ばれることが多い)は世界最大級の水産加工食品産業の街だ。タイ・ユニオン本社と工場群(いくつかの別名会社として登記されている)もここにある。街道沿いに同社やユニコード社といった広大な敷地をもつ水産加工食品工場が立ち並び、その後背地のかつて果樹園や養魚池だったところが切り開かれてた

マハーチャイの街にあったタイの携帯電話会社の宣伝パネル。ビルマ語で書かれている。



くさんの中小工場が立地している。これらの工場を支えている最大の労働力は、現在20万人をはるかに超すといわれているビルマからの移住労働者たちだ。

「ビルマから……」という表現を使うのは、彼らが狭義のビルマ人、同国の人口の約7割を占めるビルマ族とは限らないからである。マハーチャイに多いのは距離的にもっとも近いモン州出身の人々だが、彼らにどこから来たかを問うと、「ビルマから」とではなく「私はモン(族)だ」という答えが返ってくるはずだ。いずれにしても、マハーチャイはビルマからの移住労働者ももっとも密集している街であることは間違いない。アウンサンスーチー氏がビルマ軍政の軟禁を解かれ、初の外遊でタイを訪れたとき、タイ首脳との会談を1日で切り上げて駆けつけたのがこのマハーチャイだった。そのエピソードがこの街の位置を物語っている。

**人権を侵害されるビルマ・カンボジア・ラオスの労働者たち**

タイの外国人移住労働者に対する政策はいわば朝令暮改、それが

外国人師弟も受け入れることになっているが、授業はすべてタイ語だ。自国に戻ることになったとき、タイ生まれで母語に難がある子どもたちは大変な苦勞を強いられることになる。また、親たちがずっとタイで暮らす決意をしても、彼らの子どもたちがタイ人と同等の進学・就業機会を得ることは難しい。

**児童労働と子どもたちへのケア**

そのような外国人移住労働者が直面する種々の問題解決に手を差し伸べているNGOがタイにはいくつか存在する。マハーチャイに本部を置くLabour Rights Promotion Network(略称LPN)は同地域の児童労働者救出活動から始まり、現在は国内に3つの支部



ビルマからの移住労働者が暮らすマハーチャイのアパート街。ロンジー姿の人が目につく。



タイ・ユニオン社グループのツナ缶詰工場で働く労働者たちがバレーボールに興じていた。彼らはMOU(二国間協定)ビザをもったカンボジアからの移住労働者で、後ろに見える鉄条網で囲われた寮に住んでいる。

くるくると変わる度に彼らは翻弄される。労働者が必要な時は甘く、そうでない時は掌を返したように厳しくなるからだ。現在のタイ軍政は、クーデター後に「外国人労働者が逮捕される」という噂が立ち、主としてカンボジアからの移住労働者約24万人が一斉帰国してしまったことを「反省材料」として、原則として「歓迎策」を取っている。外国人移住労働者のための「ワンストップ・センター」を作り、パスポートがなくても1枚で一定期間の滞在と労働許可双方を付与するカードを発行するなどしているのがその現れだ。

タイ全国に散らばる外国人移住

をもち、外国人移住労働者の人権保護、その子どもたちの教育支援へと活動を広げている。LPNが対象とするグループは大きく2つ、水産加工食品工場労働者と漁船員だ。後者は最近カンボジアからの移住労働者が占める割合がとみに増えてきており、同国との国境に近い東部タイにある2つのLPN支部でもつばら漁船員とその子どもたちを活動対象としている。

LPNの各事務所には子どもセンターがあり、マハーチャイ本部の階上にある教室では数十人の子どもたちがビルマ語や算数を学んでいた。LPNはすべての外国人移住労働者の子どもたちが公立学校で学べるように支援することを基本方針としているが、入学時期に間に合わなかったり、母語を学

労働者の総数は政府発表で約100万人。だが、滞在許可がない「非合法」グループを含めるとその数は300万人前後に達する、と人権NGOなどが見ている。出身国別では、ビルマ、カンボジア、ラオスの順に多い。また、もっともその数が多いのはバンコク都で、建設ラッシュがその背景にある。現在、タイの法定最低賃金は全国一律1日300バーツ(農事労働は対象外で、それは外国人移住労働者にも適用されることになっている。残業労賃も同様だ。しかし、実際には様々な不利条件が存在する。「非合法」外国人移住労働者の占める比率が高い漁船員や建設業

ぶ環境がなかったりする子どもたちをセンターで受け入れている。また、子どもたちに勉学は不要だと考える親たちも少なくない。彼らの居住地区を回り、就学していない子どもたちをセンターへ送るように親たちを説得するのもLPNの重要な活動になっている。

LPNはマハーチャイ周辺の公立学校にビルマ語講師(かつて移住労働者だった人たち)を派遣している。水産加工食品工場密集地の周囲にある小学校では、教室にタイ人より外国人移住労働者の子どもたちの方が多くというのが当たり前。講師たちが最初には、状態だ。講師たちが最初にビルマ語を教えなくてはいけないのは、子どもたちではなく公務員であるタイ人教師たちだ。彼らがビルマ語を解せなければ、教室の中で生徒たちとコミュニケーションが取れないからだ。AP通信社が報じた奴隷労働事件はそのような街で起こった。

**番号札を付けられて作業する「エビ市場」**

マハーチャイの商業地区と水産加工食品工場密集地のちょうど中間に「タラート・クン」、日本語



マハーチャイのLPN子どもセンター。ビルマ語や算数を勉強している。

南部タイ・ソクラー深海港で水揚げされる西太平洋の冷凍カツオやマグロ、荷送り状には日本の総合商社の名前も。ソクラーはマハーチャイに次いでツナ缶詰工場が多いところ。



もそこにある。顧客の信用を失ったとたん、ライバルに負かされるから。一昨年から、英ガーディアン紙が半年という時間を費やして行った一連の調査報道も注目を集めていた。マレーシアに近い南部タイ・ソクラーを母港とするタイ漁船でビル

マからの移住労働者に対する船上殺人を含む深刻な人権侵害が横行。それらの船が獲った雑魚がサブライ・チェーン業者によってタイ最大のアグリビジネスであるCP（チャーンポーバカン）社のエビ飼料工場に原料として供給され、最終的に同社の相手先ブランドのエビ食品がウォルマートやコストコといった大手スーパーで売られている、という告発だ。AP通信社記事にも共通するが、奴隷労働や児童労働の実態を報じるだけでなく、それを生む構造としての食のグローバル化の問題、もっと端的にいえば消費する側の責任について踏み込んだ内容である。これを見ておく必要がある。ときにはそれが国や地域の政策を変えさせる力をもつことがあるのだ。例えば、欧州連合（EU）は現在タイ政府に対して将来同国の水産加工食品を全面禁輸にする可能性を示唆した「イエロー・カード」を突きつけている。タイ漁業や水産加工食品産業で深刻な人権侵害が発生しているだけでなく、環境面でも大きな負の影響があるという判断があつたことだ。その根底には自分たちの消費活動がそれ

らの問題と無縁ではないという考えがある。前出のガーディアン紙の一連報道、グリーンピースやヒューマン・ライツ・ウォッチといった環境・人権NGOによる調査報告などがそのような判断の補完に寄与していることは間違いない。ひるがえって、ペットフードだけの広告チラシを出すスーパーマーケットがあり、100円ショップでもネコ缶を売っている今の日本はどうだろうか。ツナ缶詰やペットフードの原料となるカツオ・マグロ類の多くは西太平洋域で漁獲されたものだが、制限を超えた違法漁が問題になっており、その裏市場規模は7億4千万ドルに達するともいわれている。ツナにエビをトッピングしたようなネコ缶があれば、それこそ中にはぎしりと問題が詰まっていることになるだろう。提供する側が何もしかないのなら、消費する側が自分たちで調べるしかない。■

〔注〕http://bigstory.ap.org/article/8f64f-b25931242a95b3063f5a90b2/ap-global-supermarkets-selling-shrimp-peeled-slaves  
〔注〕ハーシー約2.2円  
〔参考〕http://www.theguardian.com/global-development/2014/jun/10/sp-migrant-workers-new-life-enslaved-thai-fishing

### 問題がぎっしり詰まったツナ缶やペットフード

自分たちとサブライ・チェーン業者との関係を外部に対して透明にすることから問題を解決していくべきではないか。

タイ・ユニオンやユニコード社といった大手水産加工食品会社の主力商品はツナ缶詰とペットフードで、自社ブランドをもってはいくが生産量の大半は相手先ブランド製品だ。そしてどの社も輸出がその9割前後を占める。輸出先は米国、欧州圏、中東そして日本を

含む東アジア諸国が多い。安価な労働力を背景に経済的に豊かな国々の相手ブランド製品を多種作って売ること、彼らは現在の地位を築いてきた。また、水産加工食品だけでなく、輸出入プロイラーやファストフード・外食産業用食材を生産するアグリビジネスについても同じことがいえ、タイと同様に食のグローバル化を支える位置にある中国やヴェトナムなどのライバルと激しく競っている。奴隷労働などの人権侵害批判に対し、政府も企業も手取り早い方法で問題解決を図ろうとする理由

マからの移住労働者に対する船上殺人を含む深刻な人権侵害が横行。それらの船が獲った雑魚がサブライ・チェーン業者によってタイ最大のアグリビジネスであるCP（チャーンポーバカン）社のエビ飼料工場に原料として供給され、最終的に同社の相手先ブランドのエビ食品がウォルマートやコストコといった大手スーパーで売られている、という告発だ。AP通信社記事にも共通するが、奴隷労働や児童労働の実態を報じるだけでなく、それを生む構造としての食のグローバル化の問題、もっと端的にいえば消費する側の責任について踏み込んだ内容である。これを見ておく必要がある。ときにはそれが国や地域の政策を変えさせる力をもつことがあるのだ。例えば、欧州連合（EU）は現在タイ政府に対して将来同国の水産加工食品を全面禁輸にする可能性を示唆した「イエロー・カード」を突きつけている。タイ漁業や水産加工食品産業で深刻な人権侵害が発生しているだけでなく、環境面でも大きな負の影響があるという判断があつたことだ。その根底には自分たちの消費活動がそれ

らの問題と無縁ではないという考えがある。前出のガーディアン紙の一連報道、グリーンピースやヒューマン・ライツ・ウォッチといった環境・人権NGOによる調査報告などがそのような判断の補完に寄与していることは間違いない。ひるがえって、ペットフードだけの広告チラシを出すスーパーマーケットがあり、100円ショップでもネコ缶を売っている今の日本はどうだろうか。ツナ缶詰やペットフードの原料となるカツオ・マグロ類の多くは西太平洋域で漁獲されたものだが、制限を超えた違法漁が問題になっており、その裏市場規模は7億4千万ドルに達するともいわれている。ツナにエビをトッピングしたようなネコ缶があれば、それこそ中にはぎしりと問題が詰まっていることになるだろう。提供する側が何もしかないのなら、消費する側が自分たちで調べるしかない。■

に訳すと「エビ市場」と呼ばれる地区がある。首都バンコクから伸びるハイウェイに面して主として養殖エビを扱う卸売市場があり、その裏手にエビの頭や殻をむく下ごしらえ業者の作業所が並んでいる。昨年摘発を受けたタイ・ユニオン社のサブライ・チェーン業者はこの市場とは別なところに工場をもっていたが、作業の内容は同一だ。ひたすら人の手を使ってエビを選別し、頭や殻をむき、洗浄して氷と一緒に桶に詰める。それを別の業者がトラックで乗りつけて買い付け、水産加工食品工場や各地の中間流通市場に流していく。

このような作業所で働いている男女は胸に番号札を付け、雇い主（業者から頭数を集めるよう委託されている頭数的存在）は番号を付けた帳面に賃金をはさみ、仕事が終わったらそれにしたがって渡す仕組みだ。おそらく、雇い主は働いている彼らの名前も知らないだろう。大手工場のような雇用審査もなく、頭数をそろえるための飛び込み労働も多く、「非合法」グループの外国人移住労働者の割合が高いといわれている。言いかえれば、マハーチャイでもっとも弱い立場にいる人

マからの移住労働者に対する船上殺人を含む深刻な人権侵害が横行。それらの船が獲った雑魚がサブライ・チェーン業者によってタイ最大のアグリビジネスであるCP（チャーンポーバカン）社のエビ飼料工場に原料として供給され、最終的に同社の相手先ブランドのエビ食品がウォルマートやコストコといった大手スーパーで売られている、という告発だ。AP通信社記事にも共通するが、奴隷労働や児童労働の実態を報じるだけでなく、それを生む構造としての食のグローバル化の問題、もっと端的にいえば消費する側の責任について踏み込んだ内容である。これを見ておく必要がある。ときにはそれが国や地域の政策を変えさせる力をもつことがあるのだ。例えば、欧州連合（EU）は現在タイ政府に対して将来同国の水産加工食品を全面禁輸にする可能性を示唆した「イエロー・カード」を突きつけている。タイ漁業や水産加工食品産業で深刻な人権侵害が発生しているだけでなく、環境面でも大きな負の影響があるという判断があつたことだ。その根底には自分たちの消費活動がそれ

らの問題と無縁ではないという考えがある。前出のガーディアン紙の一連報道、グリーンピースやヒューマン・ライツ・ウォッチといった環境・人権NGOによる調査報告などがそのような判断の補完に寄与していることは間違いない。ひるがえって、ペットフードだけの広告チラシを出すスーパーマーケットがあり、100円ショップでもネコ缶を売っている今の日本はどうだろうか。ツナ缶詰やペットフードの原料となるカツオ・マグロ類の多くは西太平洋域で漁獲されたものだが、制限を超えた違法漁が問題になっており、その裏市場規模は7億4千万ドルに達するともいわれている。ツナにエビをトッピングしたようなネコ缶があれば、それこそ中にはぎしりと問題が詰まっていることになるだろう。提供する側が何もしかないのなら、消費する側が自分たちで調べるしかない。■



マハーチャイ「エビ市場」裏手に並ぶエビの下ごしらえ作業所（2014年撮影）。当時は多くの人が働いていた。

入ってからマハーチャイで約5人が糧を得る手段を失ったといわれている。その中には「非合法」グループに属する人もかなりいるはずだ。ただし、彼らはその立場ゆえ、声を出すことができない。一昨年8月と今年1月の2回「エビ市場」を歩いたが、裏手の作業所でエビの下ごしらえ作業がほとんど行われていないのに驚いた。入荷するエビの少ない時期だったとはいえ、その差は歴然。タイのメディアは今年に入って移住労働者を顧客にしている生鮮市場の売り上げが減少したことなどを報じている。今年1月にLPN本部を訪問した際、代表のソムボン・サケイオ氏はそのときマハーチャイで起きていた事態について以下のように話した。「奴隷労働や児童労働の問題が解決されることはむろんいいことだ。しかし、今回はタイ・ユニオン社がサブライ・チェーン業者をきちんとコントロールできていなかったところにも問題がある。それなのに、すべてを切るという形で批判をかわそうとするのはおかしい。良質な業者もいるし、多くの人々が仕事を失うことになる。」

# ネグロスとの 出会いから30年

## 3人の同志と第4期の始まり

秋山真兄／あきやま・なおえ  
APLA共同代表

**A** P L Aの活動は、1986年、国際砂糖価格の暴落で農園主に見捨てられ飢餓に襲われたフィリピン・ネグロス島の砂糖農園労働者家族への緊急支援が原点である。それから30年の長い間、ネグロスと日本が関係を持ち続けられてきたのは、マスコパド糖と balan-gon パナナの民衆交易の継続があるとともに、小さくさせられている人びとの暮らしをより良くしたいという、素朴で真つ当な思いが日本とネグロス相互に響きあってきたからである。

1986年2月に設立された日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)、2008年にJCNCを発展的に再編成して設立されたAPLAの30年に渡る活動を振り返る時、数多くの失敗が次々と思ひ浮かぶ。同時に、飢餓・貧困・抑圧の中で苦闘する人びとと触れ合った沢山の小さな物語を思い起こす。そして、共に考え、意見を交わし、具体的な形にしようとしてきた同志としてのサージ・チェル

ニギン、ベンジャミン・エスクロポロ(ベン神父)、アルフレッド・ボディオス(アンボ)のことを思わざるを得ない。1994年にサージ、2006年にベン神父、そして今年アンボが逝去した。ほぼ10年ごとで、それは日本とネグロスの連帯活動の自身の3つの変化と重なりあっている。

### 「地域自立」に取り組み始めた時代 — 依存意識という壁に苦悩したサージ

1986年、JCNCの緊急救援が開始されて間もなく、砂糖農園労働者組合のリーダーであったサージは、飢餓に襲



サージ・チェルニギンさん  
(撮影：飯田典子)

はなく、持続的に地域を発展させる努力こそが重要だということでは分かってはくれるのだが……と悩んで止まなかった。21世紀に入りJCNCとベンは、NGOや地域住民組織を通さずに、自営農家になろうという意思を持っている個人と直接関係をもって育成することを決断した。そして各地に分散しているもの、自営農民への道を歩み始めた50農家ほどのネットワークが形成された。ベンは自分の教会でミサの後、個人農家の作物を売るバザーを毎週のように開催して励まし続けた。しかし、ベン神父も2006年1月、道半ばにして亡くなった。



ベンジャミン・エスクロポロさん  
(ベン神父)

### 若い世代が仲間を作り農業を楽しむ時代へ

— カネシゲファームの誕生を支えたアンボ  
2008年、それまでの経験をより広くアジア各地の小農民と分かち合うことを願ってJCNCを再編する形でAPLAが発足し、インドネシア、東ティモール、日本国内にも活動を広げるとともに、ネグロスでも新しい活動に取り組むことになった。



アルフレッド・ボディオス(アンボ)さん

農園労働者や零細農民は、子どもたちに「無学で貧乏で惨めな農民」にはなつてほしくないと考えたのが普通である。しかし、少数ではあっても自営農を目指す農民から、ようやく獲得した自分の農地で子どもに農業をさせたいという思いが生まれ始めた。また、都会に出て行った若者たちも低賃金労働にありつくしなく、都会生活に疲れ果てて村に帰ってくるのが多くなった。そのようななか、ネグロスの農民たちが北ルソンの自営農家を訪ねる機会をつくった。そこで彼らは「自分たちに不足しているのは、言われたことだけをやるのではなく自分たちで工夫すること仲間と一緒に頑張ることだ」と感じとった。そして「農業をはじめ様々なことを学び、仲間を作り、一緒に考え、そして暮らせるだけの現金収入を得られる農業技術を身につける場所がほしい」という願いに結実した。カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(RFC)の誕生である。その責任者となってくれたのが、小さな漁村の村長として地域住民のために奮闘していたアンボである。

彼は、PAP21の「有畜複合農業」を

Thirty years with Negros people.

Thirty years with Negros people.

われている砂糖農園労働者に「今は魚を渡しているが、魚をとる網を持たせたいのだ」と語った。それがきっかけとなり農業技術修得、耕作地確保、現金収入創出のためのプログラムが開始され、日比民衆間の経済的連帯事業である民衆交易が立ち上がった。飢餓支援が一段落した後も、内戦の激化で生まれた多数の島内難民への緊急救援を継続しなくてはならなかったが、JCNCとサージは、農園主に「隷属」させられている労働者が自分たちの食料を自分たちの土地で作作り、集落の問題・課題を自分たちで考え決定し実行する「地域自立」を目指すため、耕作放棄された砂糖畑の占拠、研修農場の設置、農具・水牛・種苗の配布、住民組織の形成・強化などを実施した。

しかし、農園主の妨害、軍隊による嫌がらせと略奪によっていくつもの活動が潰された。同時に、何世代にもわたって農園労働者として生きてきた人びとの依存意識が変わらないための失敗も多かった。依存意識という大きな壁をどうすれば突き破ることができるのか、サージは悩み続けていた。

90年代に入ると社会変革を目指していた民衆運動が闘争方針をめぐって分裂した。それに乗じた比米両政府による分裂工作も相まって、民衆を置き去りにした組織内の権力争いと資金分捕り合戦が激化していった。砂糖労働者組合もその一つであり、常に民衆と共に歩もうとしていたサージの悩みとストレスは深く激しく、それが弱っていた心臓の発作を誘発し、94年10月、帰らぬ人となった。

ベースに、長いこと放棄されていたBMW技術を活かして、それらを基盤とする小規模養豚による循環農業技術を若者が修得すること、そして彼らが村に戻って自営農家となり、その技術・考え方を村人たちに知ってもらい、環境に配慮した持続的農業を地域に広めていくという方針を打ち出した。そして、農園労働者から自営農民となっていたカルロスに農場長を引き受けてもらい、2009年7月、第1期研修生を迎え、KFIRCの歩みが始まった。しかし第6期生の卒業式目前の今年1月、アンボもまた、道半ばのまま亡くなった。

### 新しい道を歩み始めた仲間たち

このように、JCNC・APLAは、サージ、ベン、アンボと一緒に、ネグロスの砂糖農園労働者や零細小農民が自営農民として生きていく道を歩もうとしてきた。その過程で起こった様々な失敗・問題・課題も、この3人の情熱と素朴で真つ当な思いで乗り越えてきた。KFIRCはこれから多くの課題・問題を抱えざるを得ないだろう。そのことを思うと第4の同志は誰なのだろうかと考えなくもないが、もはやそのような同志は必要がなくなったのかもしれない。

今、農場はカルロス農場長、研修生の母親代わりになっているピンピンとチータを軸にしつつ、養豚責任者のジョネル、マネージメント全般をこなすエムエム、カルロスの右腕になったレネの3人の若者を中心となって、農場の生産・運営、研修生の教育、卒業生へのフォローを行

### 「農業の自立」を問われた時代 — 自営農民を励まし育成したベン神父

1993年、砂糖労働者組合執行部に対する不信と同時に、民衆交易のパナナ産地でのバナナ病害の蔓延という危機的状況に直面し、単に現金収入を得て経済的な自立をすることだけではなく、「農業で自立するとは何なのか」ということを根底的に問われることになった。それを受けてJCNCは、個人が持続可能で低コストの営農を実現する「有畜複合農業」を推進するという「21世紀に向けた民衆農業創造計画(PAP21)」を提示した。しかし社会変革運動組織として形成されてきた現地のNGOや民衆組織には、個人営農をベースにしたプログラムであるPAP21を納得してもらうことは容易ではなかった。

提案して2年、サージ逝去の翌1995年、それまでの政治的活動の限界を総括し、新しい形で民衆に奉仕する思いを持って地下運動から戻ったベン神父が現地責任者になり、PAP21はようやく動き始めた。ベンはサージと同様、精力的に地域を訪ね歩き、PAP21の意味を語り、上からの目線ではなく、農園労働者・零細農民を仲間として信頼関係をつくりだしていった。

しかし元砂糖労働者の集落組織は、やはり個人営農より共同耕作を優先し、住民の組織依存という姿勢を払拭することも容易ではなく、PAP21の歩みは遅々としたものであった。ベンは「これまでのように生き延びれば良いということでは



2015年1月、研修生の卒業式にて。

っている。彼ら3人はPAP21農家と balan-gon パナナ生産農家から研修生としてやってきた息子たちである。ドロップアウトや回り道をしている卒業生もいるものの、各地で頑張っている卒業生たちがいる。共に学び、共に工夫し、仲間と一緒に頑張る、自分の土地で食料を作り現金収入を得る「魚を取る網」を持った若い自営農民が育ち始めている。

私たちは、彼らが一緒になって歩いていく姿を見つめ続けつつ、時には相談を受ける仲間であるという、第4期目の新しい道行きが、今始まったのではないだろうか。

(左) BMW技術：バクテリア(微生物・ミネラル)濾石、鉱物・ウォーター(水)の略。微生物とミネラルの動きを利用して土と水が生成される生態系システムを人工的に再現する技術。

03

# カネシゲファームの ドタバタ騒ぎ



寺田 俊 / たらだ・しゅん  
APLA事務局



出産時に病院にて。嬉しそうなお顔のレネくん。

僕のネグロスの友人たちは「貧乏」をネガティブに捉えていません。お金がなくて大変な時も笑顔で暮らしています。「NOMANEE（お金はないけど）」「Mayハニー（恋人はいるよ）」のようにマイナスの言葉を誰かが発すると、それを聞いた誰かがプラスの言葉を足してくれるということがよくあります。

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KFRC)にも、とつてもたくましい人がいます。敢えて「NOMANEE、NOハニー」と自分で言っているのは「はっはっは!!」と笑っている野菜担当のスタッフ、レネくん。KFRCのムードメーカーです。

サトウキビ農園シアソンの貧しい家庭に生まれ、小さい時からお父さんの畑を手伝いながら育ち、高校に

も進学できませんでした。7年前、第2期研修生としてKFRCにやってきました。養豚のセンスはまあひとつでしたが、野菜栽培に関してはピカイチ。卒業後にスタッフとしてKFRCに残ることに決めました。普段は人見知りでおとなしいけれど、大好きなお酒を飲んだら誰よりもおしゃべりになるレネくん。今日はそんな彼のお話です。

「ピカド！(お金がないよ)」が口癖でもある、レネくん。彼がそう言うたびに「じゃあお酒やめたら?」「タバコやめたら?」と他のスタッフにたしなめられます。彼曰く、その2つは自分にとって、ガソリン。お酒とタバコがないと仕事の効率が悪くて、結果KFRCの売り上げが下がる、というのが彼の言い分です。

そんな彼がなんと昨年結婚しました。少しでも収入を増やそうと、KFRCの野菜とは別に自家用野菜や鶏を育て必死になっている時に今度は子どもができました！しかも双子ちゃんです！幸せも2倍ですが、出費も2倍になっちゃいましたね、レネくん。

子どもができてから、お酒やタバコの量が減ったか気になりますか？今日もきつと言いつつしていると思えます。

01

# カカオ <sup>キタ</sup> kakao kita

カカオ民衆交易奮闘記

14

津留 歴子 / つる・あきこ  
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員



イモ栽培の達人、ヤフキモ族の隣人。

「お隣さんは山の民」とボヤキながらも、強い団結力のある山岳部が、大きく沿岸部、多民族社会ですが、山岳部と二つの集団に分けて語ることが多いのです。カカオ事業の展開拠点となる山岳部の人びとと接する機会は今までありませんでした。ところが、この度カカオ・キタの事務所が引っ越した先のお隣さんは山岳部ヤフキモ族から数世帯で集団移住してきた人びとでした。

実は沿岸部の人びとは山岳部の人びとを少し脅威に感じています。それは比較的開発が進んでいる沿岸部に山岳部の住民が集団で移住してきて、「空き地」と見える土地にバラック小屋を建て、イモや野菜の栽培を始めるからです。沿岸部の人びと「ここは僕たちの土地なんだけどな」と思っています。

「あ」とボヤキながらも、強い団結力を示す集団に面と向かって「出て行け」とは言えないようです。また、山岳部では農作物の不作時は飢餓の危機に直面したりして大変であることも知られているので、住みよい場所へ移住したいという気持ちも一定理解しているのかもしれない。

さて、カカオ・キタの借家とヤフキモ・グループのバラックはトタン板を境にピッタリくっついていて、朝から女性たちの威勢の良いおしゃべり、子どもの泣き声、夜中には男性陣による祈りの歌(ワヤ)等々、ヤフキモ語で理解不能ですが、隣人の生き生きとした暮らしが伝わってきます。ある日ふと気づくと借家の前庭の柵から公道の間、約5メートル幅の空き地(？)で隣人が草刈を始め、その後火を付け燃やし始めました。不可解に思いつつも静観。数日後、朝からそこで土を耕す隣人。さすが出て行って彼らに聞いてみました。「何してるんですか?」するとここでイモの栽培をすること。因みに文献によるとパプア山岳民族はイモの栽培技術に優れているそうです。イモが収穫できたら少しお裾分けしてくれるから、と仄かな期待を抱きつつ、お隣さんのイモ栽培を観察したいと思っています。

## お隣さんは山の民

04

# Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい? 02

『拝啓天皇陛下様』(1963年、日本)  
【監督】野村芳太郎 【出演】渥美清、長門裕之、左幸子、桂小金治、藤山寛美

重政 栄一郎 / しげまさ・えいいちろう  
エディトリアル・デザイナー



『拝啓天皇陛下様』  
発売元：松竹株式会社  
価格：2800円(税別)

『男はつらいよ』シリーズの始まる6年前、若き渥美清が主演の喜劇。昭和6年、ヤマショーこと山田正助が召集され陸軍に入隊する。この男、幼き頃から天涯孤独。親類のものをたらい回しにされ、貧しく過酷な環境で育つ。まともな教育も受けておらず、読み書きもままならない。そんなヤマショーにとって衣食住の心配がないどころか給料までもらえる軍隊は天国そのものだ。休日にはセックスだって割引料金でできる。厳しい軍事訓練もお決まりの新兵いじめも如何程のこともない。そして彼は軍への忠義と大元帥たる天皇への尊崇の念を強く抱くことになる。

南京陥落の報を受けた際、「これで戦争が終わる」と喜ぶ兵隊仲間を尻目に、「軍に残してもらいたい」と天皇に直訴の手紙を書こうとすらすら。まさしく「希望は戦争」だ。

その後、希望通りに戦争が続くどころか泥沼化していく中、彼は中国戦線に送られ大陸各地を転戦する。

この誰よりも「優秀」な兵隊は愛国教育や軍事訓練が作ったのではない。貧困(格差)と世間の冷たい風(差別)と無知が作ったのだ。これに妬みと恨みが加われば最強(最恐)最凶だ。それは国軍兵士でもテロリストでも同じである……。

## 「希望は戦争」。怖い渥美清……

02

# ひろつくとゆうこの 百姓の100章

A Farmer have One Hundred Stories.



斎藤 博嗣&裕子 / さいとう・ひろつぐ&ゆうこ  
一反百姓「じねん道」



『センス・オブ・“にゃん”ダー』。母ネコの乳にぶらさがる子ネコたち。(「じねん道」の縁側にて)

第二章 「時給」から「自給」へ、「時間の自給」  
自然と自分を頼る「百姓力」

「職業は百姓です」と話すと決まってしまうベスト3。①朝早いんですよ? ②現金収入は? ③農産物何を作ってるの? 自然が相手だから大変だね。

確かに……百姓暮らしは、労働として収入の少ない「ネコの手も借りた」テンテコマイな毎日。

ネコと言えば今、「ネコを飼う人がイヌを飼う人を上回り、空前のネコ・ブーム」だそうなんです。

この混沌の時代を「お金」と「時間」に縛られずに生き生き・生き抜くネコに私たちが生き方を教わっています。斎藤家ではそれを、イヌのように真面目な「センス・オブ・“わん”ダー」ならぬ、不完全を愛するネコの感性を「センス・オブ・“にゃん”ダー」と呼んでいます。ネコの

①早起きで三文徳するより、太陽とポカポカ起きる  
早起きは三文の「毒」? オックスフォード大学の研究では「世界中の人々の睡眠パターンを分析、年齢層ごとに推奨する起床時間を提示。青年期(15~30歳)朝9時、中年期(31~64歳)8時、高年期(65歳以上)7時が理想。早起きは心身に大きな負担、6時前の起床は……人間として本来あってはならない」という結果!

②買わなくてもある「9カ条」  
(1)すべてある(ないものはない)、(2)断る、(3)減らす、(4)捨てる、(5)借りる、(6)貰う、(7)直す、(8)再利用、(9)作る。お金に頼らないほど、人間本来の「イキモノ」としての「力」が湧く。

③自然は敵ではなく、心づよい味方  
自然は「相手(敵)」ではなく、生命を育む最大の「味方」。自然を換金作物としてのみ扱わず、自然からダイレクトに恵みを受取る。

草の時間、木の時間、ネコの時間、四季と共にある時間、二度と来ない今日という日、今という時間……。「百姓力」は「時間の自給」なのだ。

# APLA 食堂

Kitchen APLA

## 今日の食材 **ゲランドの塩**

**吉田友則** / よしだ・ともりの  
出張料理「きまぐれや」シェフ

### ゆっくりじっくりね。

塩。付き合ってみると色んな表情をみせてくれる。使い方、温度、時間そして種類。

旅する料理人を生業にしているの、各地の色んな顔をした塩に出会う。ヨーロッパ滞在中にブルターニュで出会ったゲランドの塩もその一つ。その景色は、太陽と風そして潮の満ち干きを利用した時間の経過を忘れてしまうものでした。じっくり、そしてゆっくりと仕上がっていくこの塩は料理する時の塩の使い方の概念が変わっていくきっかけになりました。

「味付け」という言葉がありますが、肉や魚、野菜にかけて食べるコトに当たり前のように慣れていたし、料理の世界に足を入れても至極当たり前のように塩をつけていましたねえ。何気なくつけていた塩でしたが、あれだけ時間をかけて出来上がっていくゲランドの塩を少し神妙な気持ちで味見したのをよく覚えてます。

角がなくて余韻の長い味。今ならそんな表現もできるのですが、当時は「旨っ！塩なのに甘っ？」正直そう感じたものです。塩は甘いんだよ、とも言えるほどの経験もまだなく(笑)。ただイメージとして湧いたのは、じっくり素材を煮込んだポトフの仕上げに、シンプルに焼いた野菜にそっとかけて、ローストビーフの下味の刷り込みに、そんなつかい方。早速宿に戻り、玉葱を皮ごとオープンで蒸し焼きにしてオリーブオイルとゲランドの塩をかけて食べた時に、「ああそういうことか」と。玉葱の甘さの輪郭が物凄く出ていて納得した。塩を使うイコール素材の素顔を味わう為なんだなあ、決して塩味をつけて食べる為でもないんだなあ、と。それから20年、色んな塩に出会いながらもゲランドの塩との付き合いは続いている。そんななか20年前に見た景色の時間の流れが本当に料理にも作用するんだなという景色に再び出会う。

西宮市門戸厄神にある洋食バルDoors Kitchenの「太陽と



風の塩ローストビーフ」。このお店の料理監修をするなかで、主軸商品を「ローストビーフに」の声で試作が始まった時、どうせいいお肉を探すなら、より素材の旨さが引き立つように塩もこだわろうと、ゲランドの塩をチョイスした。

そこでの仕込みの景色は、肉の塊にゲランドの塩をゆっくりじっくりとすりこんでいく。

時間をかけ塩をなじませ、低温でゆっくりじっくりと加熱していく。仕上がったローストビーフは、胡椒もスパイスも使用しないのでお肉そのものの素顔が見える仕上がり。ゲランドの塩が出来る景色と太陽と風の塩ローストビーフの仕上がりまでの景色が僕の中でリンクした。

どんな使用方法でも勿論構わないのですが、時間をかけてじっくりゆっくりと仕上がるゲランドの塩。時間をかけて素材の素顔が見えるようなのんびりした料理に使うのもまた一興かと。太陽と風、潮の満ち干き。

ほら、想像するとなんだかお腹すいてきませんか？■

**洋食バルDoors Kitchen**  
兵庫県西宮市下大市西町10-1  
<https://www.facebook.com/doorskitchen/>



太陽と風の塩ローストビーフ。

### 筆者プロフィール

#### 出張料理「きまぐれや」シェフ 吉田友則

製菓製パンの専門学校で勉強した後、料理の世界に入る。長野県八ヶ岳の井出忠利氏に師事し、ジャンルに囚われない季節感を大事にした料理を目指すべく海外に渡る。帰国後、イタリアン、フレンチ、洋食屋などで経験を積み、口福感の残る料理を提供すべく独自の活動を展開している。日本一移動するレストラン「きまぐれや」は16年目を迎え、開けたドアは2400軒。



### 自慢する人

**鈴木裕** / すずき・ひろし  
株式会社エヌ・ハーベスト代表

まるで上田さんの部屋のようなスワラジ工房のブース。



こんなに温もりのある服を着たら、他の服が着られなくなりそうです。  
元々私もパキスタンなど現地に行っていたのですが、スワラジ工房の上田さんの服は、現地で買うよりもデザインも着心地もよく、いつも着るようになりまし。そして、今ではオーガニックのスパイスやドライフルーツを販売しているエヌ・ハーベストのお店でも取り扱うようになりまし。  
ここまでこだわって服を作っている人は初めて会いました。麻ならここ、綿ならここ、染色ならここ、と

## わたしの友産友消じまん 08

### スワラジ工房の巻

いうように、様々な国や地域の生産者のところに自分で足を運んで、服作りをする。彼ならではの仕事です。このスタイルは、私がやりたいこととすごく近い。ホームステイをしながら現地の家庭料理や生活様式を学び、日本で伝えるというスタイル。それに自分なりのこだわりやデザイン性など、オリジナリティを加えて、現地の方たちを敬いながら、日本人に合うものを作る。まさにエヌ・ハーベストが目指すものと一致しています。そういう意味でスワラジ工房の上田さんを尊敬しているし、お互いに尊重し合える大切な友人でもあります。自分自身がそういう服を着ることで私が目指すものの再認識にもなるし、気が引き締まります。



ベトナム北部標高1600mに位置する大麻布の原産地サバ。



本藍染のようす。谷の風にはためく濃厚に染まった大麻布は、天地と人をつなぐ象徴のように美しい。

彼が生み出す服・食・音楽全てに現地の空気感や生活そのものがあります。イベントに出店する際のブースもそう。まるで彼の部屋に入ったかのような生活感があるのです。商品だけではなく、ハサミやおぼんや水筒など全てのものにこだわっていて、そういう所にもすごく影響を受けています。私も原点である生産者に対しての思いを大切にしながら、自分のできる範囲で無理はせず、現地で学んだことの多くを日本の中で表現していきたいです。■



いつもスワラジ工房の服を着ています。(筆者の鈴木さん)



エヌ・ハーベストの店内。什器はすべて手作りです。

**スワラジ工房**  
<http://swaraj.gozaru.jp/>

**エヌ・ハーベスト西荻窪店**  
東京都杉並区松庵3-31-17-1F 《電話》03-5941-3986  
<http://www.nharvestorganic.com/>

【事務局だより】

編集後記

今年5月、フィリピンは大統領選挙を迎える。上院・下院・知事・市長まで同時に直接投票する熱い政治の季節を迎え、今、国中が選挙フィーバー。政党よりも候補者の人気で当選を左右する。今年は6人の大統領候補がしのぎを削り、60歳を迎えるマルコス前大統領の長男“ボンボン”マルコスも副大統領の有力候補。ちなみに母、イメルダ夫人は現下院議員、姉のイレースは北イロコス州知事。さて、今年の選挙の行方は？(大橋)

特集記事で紹介されているAP通信社の記事を昨年末にウェブ上で読んだときの衝撃は今もよく覚えています。一部を要約してSNSに投稿したところ、通常の何倍ものシェアやコメントをいただき、やはりこうした情報を知りたいと思っている方は少なくないんだ、と実感しました。今回、岡本和之さんに改めてタイの水産加工の現場の報告をいただきましたが、「提供する側が何も言わないのなら、消費する側が自分たちで調べるしかない」という言葉にNGOとしての役割を再度確認しているところです。(野川)

ハリナ HALINA

2016年2月号 vol.02-no.32  
2016年5月1日発行

編集長  
大橋成子

編集者  
野川未央

表紙写真  
長倉徳生

デザイン・制作  
十年舎

編集・発行  
特定非営利活動法人 APLA  
(APLA/あぷら: Alternative Peoples Linkage in Asia)  
〒169-0072  
東京都新宿区大久保2-4-15  
サンライズ新宿3F  
tel. 03-5273-8160  
fax. 03-5273-8667  
e-mail info@apla.jp  
URL http://www.apla.jp

印刷  
株式会社セイズ

事務局の動き (2016年2月～2016年4月)	
2月 1日	ハルシステム埼玉・平和募金贈呈式に出席しました。
2月 2日	東京学芸大学附属高等学校の社会科見学実習を受け入れました。
2月 3日	早稲田大学アジア太平洋研究科East Asian University Institute (EAUI) プログラムのフィールドトリップを受け入れました。
2月 4日～14日	ヒカリエShinQsの催事「ショコラZakkaフェスティバル」にチョコレート・アライアンスとして出店しました。
2月 5日	ハルシステム東京・育児のツボ委員会主催の「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで野川が講師をつとめました。
2月 6日	こどものいえ そらまめ(福島県福島市)主催の「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで大久保が講師をつとめました。
2月 6日～17日	フィリピン・ネグロスに寺田が出張しました。
2月 7日	フロマエカフェ(東京都荒川区)主催の「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで野川が講師をつとめました。
2月 13日	「国際文化フォーラムin逗子2016」の企画として開催された「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで野川が講師をつとめました。
2月 19日	BMW技術基礎セミナーに寺田が参加しました。
2月 20日	理事会・評議員会を開催しました。
2月 21日	東京朝市・アースティマーケットに“P to P Café”として出店しました。
2月 21日～3月 1日	東ティモールに野川が出張しました。
2月 23日	第3回「再生エネルギー事業化準備会」に参加のため秋山が二本松を訪問しました。
2月 27日	ドキュメンタリー映画「遺伝子組み換えルーレット」上映会&ジェフリー・M・スミスさん特別講演会に実行委員会メンバーとして参加しました。
2月 28日	AOYAMA CACAO MARKETにATJと共同で出店しました。
3月 7日	熱海市立初島小・中学校で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました(講師は吉田シェフ、お話は野川が担当)。
3月 16日	ハルシステム東京・茶々ネット委員会主催の「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで野川が講師をつとめました。
3月 26日	特定非営利活動法人開発教育協会(DEAR)主催の「教材体験フェスタ2016」でワークショップ「甘〜いチョコレートがおしえてくれること」の講師をつとめました。
3月 27日	東京朝市・アースティマーケットに“P to P Café”として出店しました。
3月 28日	毎日新聞社主催の「学びのフェス2016春」にてATJと共同でワークショップ講師をつとめました。
4月 3日	東京朝市・アースティマーケットに“P to P Café”として出店しました。
4月 10日	特定非営利活動法人開発教育協会(DEAR)と共催で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
4月 15日～22日	東ティモールに野川が出張しました。
4月 17日	羽村市コミュニティセンターで「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップが開催されました。(講師は吉田シェフ、お話は大久保が担当)。
4月 23日	理事会を開催しました。
4月 23日、24日	アースティ東京2016にATJと共同で出店しました。

事務局からお知らせ

年次総会の日程

第九回総会を2016年6月4日(土)に開催します。2016年は、ネグロスとの連帯が始まってからちょうど30年。総会後の交流会では、30年の歴史を振り返り、今後の活動について会員の皆さんと意見交換する場を設けたいと考えています。詳細は追ってお知らせいたします。ぜひご参加ください。

東ティモール・フェスタ2016

東ティモールに関わる団体・個人が集まって、東ティモールの魅力を体感できるイベント「東ティモール・フェスタ2016」を開催します。APLAがエルメラのコーヒー産地で一緒に活動している環境活動家でありミュージシャンのエゴ・レモスさんも来日しますので、ぜひあそびにいらしてください!  
日時: 2016年5月21日(土) 13:00～19:00  
会場: 上智大学四谷キャンパス 9号館地下カフェテリア(入場無料)  
詳細は、ウェブサイト(http://www.parcic.org/TLfesta2016/)をご覧ください。



KF-RC理事会の様子。(2016年2月)

1月中旬、KFRCでミーティングを開き、スタッフ体制を再編しました。事務局長にエリマー・トグハツさん(通称エムエム)、副事務局長にジョネル・ペントウラさんが就くことに決まりました。ふたりは第一期の研修生でもあります。2009年7月、KFRCがこれから始まるという時にやってくる、まだ草ぼうぼうで豚舎もボロボロだった農場の整備から研修が始まりました。初期から苦勞を共にしてきたふたりです。全員一致で決まりました。といっても、事

務局長という経験はありません。もちろん現地のスタッフと一緒にAPLAもサポートしていきます。理事会の体制も再編しなくてはなりません。新理事としてKFRCスタッフの中から代表を出すようにと提案をしたところ、チータさんの名が挙がりました。彼女は、昔BGA(バランゴン生産者協会)の委員長として組織運営を担った経験があります。「皆に推薦してもらったので引き受けるけれど、これまで通りスタッフ全員が理事会に陪席して、現場からの報告や声を一緒に出してほしい」と。また、次期2年後には若い世代のKFRCスタッフから理事を選び、その責任を持たないといけない」との希望を語り、もちろん皆がそれに賛成しました。新理事長には、これまでも理事であったATC(オルター・トレード社)社長のヒルダさんが選出されました。「ATCのことで毎日忙しく、どこまでKFRCのことをサポートできるかわかりませ

んが、皆さんが推薦してくれたので喜んで引き受けます。これまで以上にATCとKFRCとのつながりを強くしていきたい」と話してくれました。その後、バランゴンバナナの生産地域で養豚・堆肥作りを進める新しい計画に、KFRCスタッフが養豚や循環型有機農業の講師役として参加したり、ATCが始めた有機野菜の宅配サービスにK

FRCの野菜も入れたりなど、協働が進みはじめています。KFRCスタッフも積極的な提案や意見を出すようになり、アンボさんの不在を乗り越え、自分たちが責任を持たなくてはならないという意識を強く持つて歩もうという姿があります。悲しい出来事を乗り越え、次期KFRCの新たな芽が始めました。(APLA事務局・寺田俊)

From Negros, Philippines【ネグロスより】

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス新体制!

6年度にかけて、「これから5〜10年を見越した中長期計画の準備を始め、代表を務めているアンボさんから現スタッフに引継いでいく」とい

2016年1月4日、カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KFRC)代表のアルフレッド・ボディオスさん(通称アンボさん)が逝去されました。201

うことを計画していた矢先の出来事でした。しかしKFRCスタッフは前を向いています。口をそろえて「これまでも農場のことは私たちがやってきた。これからは6人みんなで助け合いながらさらに良い農場にしていこう」と話します。

1月中旬、KFRCでミーティングを開き、スタッフ体制を再編しました。事務局長にエリマー・トグハツさん(通称エムエム)、副事務局長にジョネル・ペントウラさんが就くことに決まりました。ふたりは第一期の研修生でもあります。2009年7月、KFRCがこれから始まるという時にやってくる、まだ草ぼうぼうで豚舎もボロボロだった農場の整備から研修が始まりました。初期から苦勞を共にしてきたふたりです。全員一致で決まりました。といっても、事



KF-RCスタッフ。お揃いのTシャツを着て。